

Musée Bernard Buffet



Buffet-Kun e-book vol.11

いよいよ80年代へ!! 月刊ビュフェくん 残り20万です...

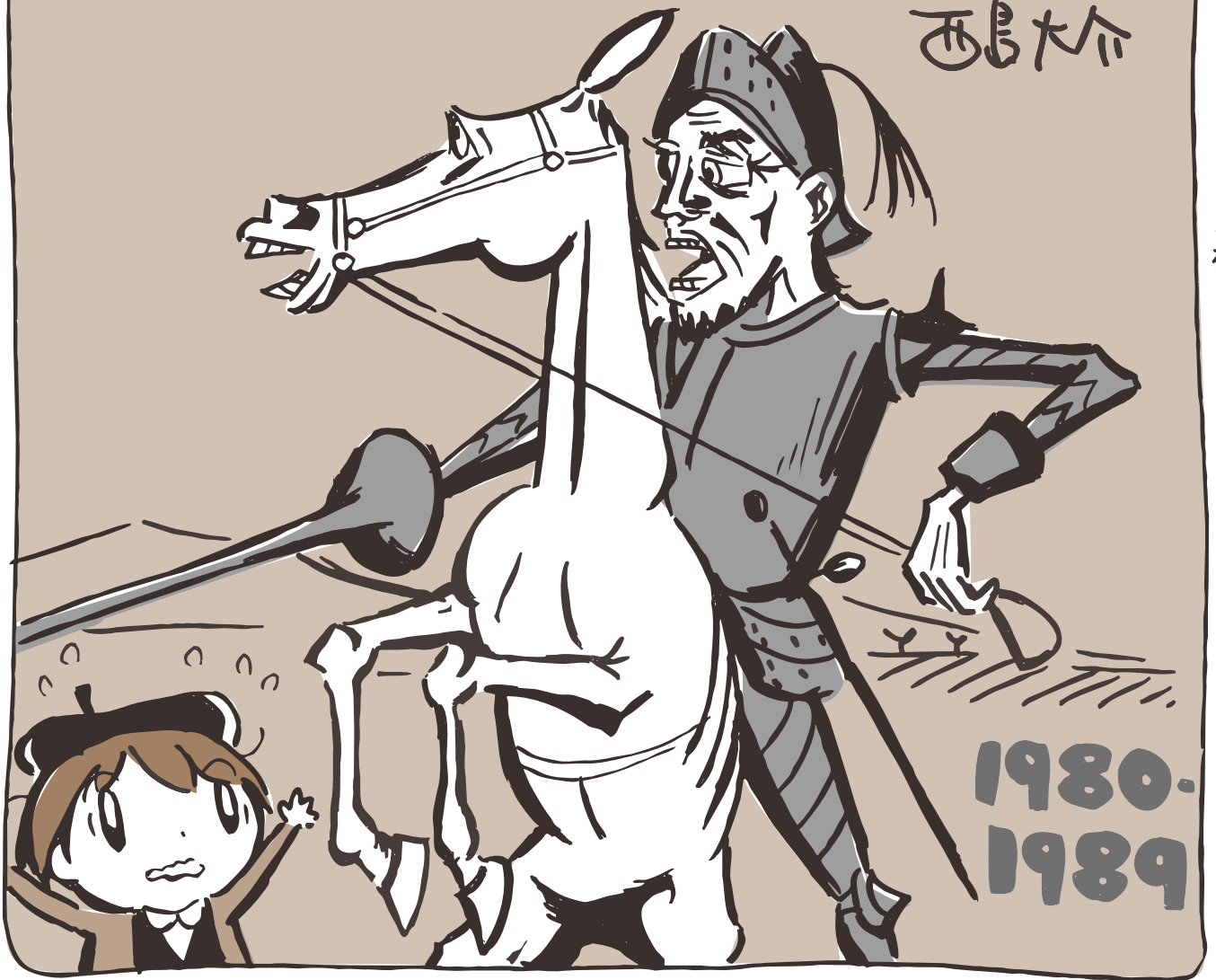
作品「ピン・キボートと羊の群れ」(1988)あり。

ベルナール・ビュフェをもっと好きになる月刊紙!!

月刊ビュフェくん

第11号

西島大介



サンチョパンサのポーズ!!

妻アサ子へ!

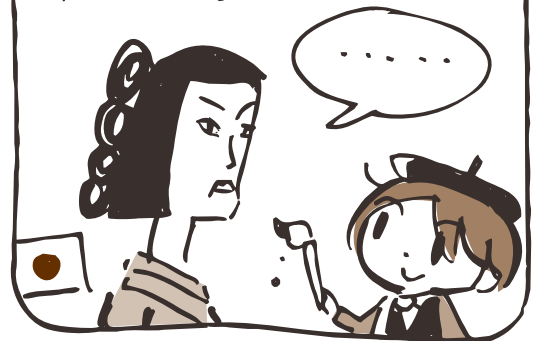
1947年に初個展。50年代に若くして
絶大な評価を得て、三枚重の60、70年代を
人気作家として駆け抜けたビュフェ。
1980年に来日。



ベルナール・ビュフェ美術食官
開食官より 7 年後。創設者
岡野 喜一郎と親交を深め
日本観光を楽しみました。



日本滞在に
触発された
ビュフェは、同年
日本を題材に
絵画を制作。
翌 1981 年には
テーマ展「日本」を
開催。 **Le Japon**



1988 年にはテーマ展 **NINJA** 日本人から見ると
「木目業と歌舞伎」を開催。 不思議な

ビュフェは **SUSHI** **Mt. Fuji** イキゾクズムを
コハダ 好きだったから → 感じますが....

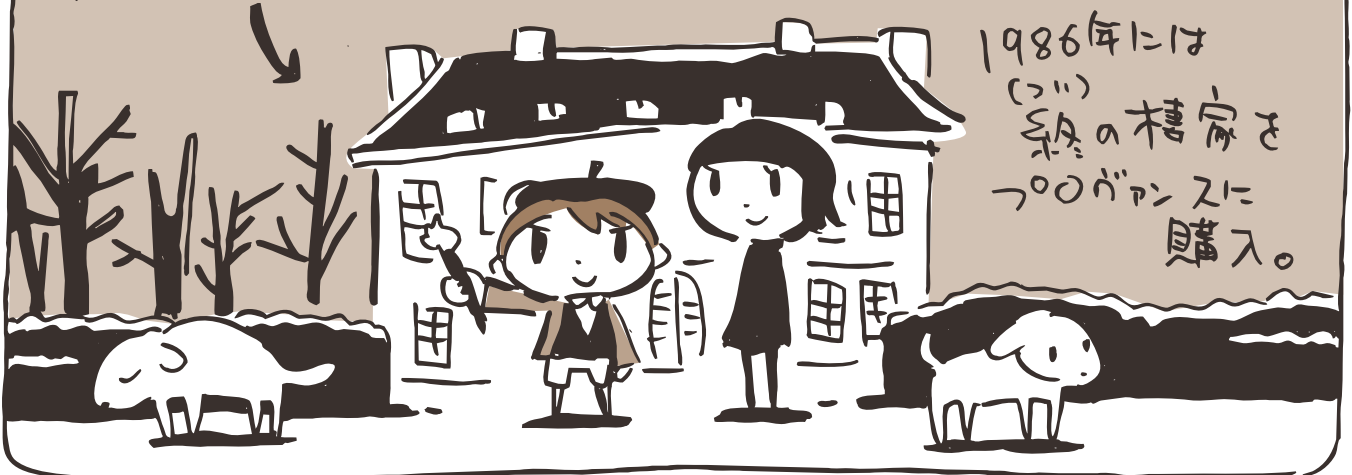
TEMPURA

ビュフェ的には「木目」というより、
「木目業」などに連なる
「観光」シリーズの
一環なのでしょう。



時に、屈託のなさも、ビュフェを特筆づける一要素である。

1980年、フランスのノルマンディー地方
サン＝ワレスパンに食館を購入。
いったり行ったり来たりしながら制作を続けます。



50～80年代。世は和風311、
アートの流行(モード)も変化していきませんが、
ビュッフェは貫いて「**画家**」であり続けます。
デビューから30余年、気がつけば**50代**のベテラン。



この自画像には
デビュー当時の
貧しさや
セリ実さを、
改めて 80年代に
描き、自分自身を
見つめ直すような
ムードが
あります。

売れても...

富を得ても...

心は
あの七夏の...

まま...



服装は1970年代、サングラスで母と描いた自画像のまま...

ビズフェとはまたスアンスの異なる
ホム、フ・アートの旗手、**アンディ・ウォーホル**が
1985年に美術史家 ベンジャミン・ブナローと
対談した時の言葉によると.....

(ビズフェ)

彼はまた
描いてる

Warhol

そして僕は その作品を
見続けている

彼の作品は
いいよ



ア...

日本の
TDKの
CM!!

(1983)

さようなら... ビズフェくん... (泣)...

ビュフェと虫と鳥と立体と...

Musée Bernard Buffet



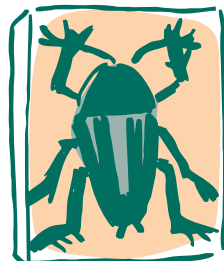
鳥 (1963)



オモテ面では紹介できなかった
ビュフェ作品に 虫 や 鳥、カエルなどの
“生き物” からなる 1960年代を中心に
制作されたシリーズがあります。



小さいミミズク
(1963)



ツガキムシ (1963)

1963年
ラ・トゥー
にて



Le Musée
Bernard

子どもの頃
勉強がさほど得意では
なかったビュフェはしかし、
「自然科学」には大きな興味を
持ちました。

1963年から制作され、翌年テーマ展
「バルナール・ビュフェの博物館」として

発表された作品群は
さながら「生き物の図鑑」です。

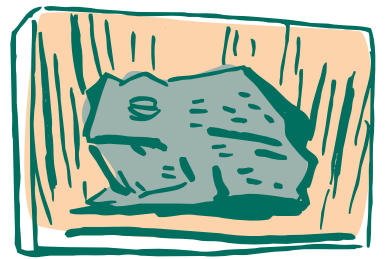


七面鳥 (1963)



昔は
飛んだ鳥は
描いてたの

そんなビュッフェについて ヒュー・ン
ベルジェ
11月...



ガザ (1964)

人間の世界が、あいかみらず
彼に敵意を向けていた時に
動物の世界は、大きく
手を広げていて
くみだ



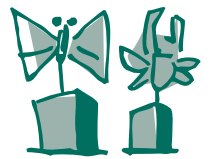
※ ビュッフェ美術館に
屋外展示されている
立件は1975年に
改めて鋳造されたもの。

昆虫
採集だーい

人間はもう
嫌だよー



蟹
(1963)



(1965)



童心に 戻ったかのような
制作が楽しかったのか、
ビュッフェは昆虫モチーフの
彫刻作品も制作。
画家であるビュッフェにしては
とても珍しい立体作品です。

um de
Buffet

虫蝶
(1963)



赤い昆虫
(1963)



そんなわけで、ビュッフェ独自のタ...4で虫を描けば、
そこには例えはカフカの小説「虫」のような
不条理は無く、素朴な好奇心があります。